



黒色丸帽の制帽

協力：福澤研究センター、慶應義塾図書館

だけで、厳密には制服制定とは言い難い。しかも大正に入ると再び和服が増え始め、当局は1918（大正7）年頃に、大学部本科生に対しても詰襟制服・角帽への制服統一を試みた。その後、詰襟は定着したものの、いかめしく仰々しい角帽は人気がなく、普通部生がかぶったと言われる、庇がまつすぐで上部が波打っている独特の丸帽が大学部本科生にも定着していった。「アンパン帽」とも呼ばれた義塾の丸帽と低い襟、学部・学年を示す記章なしの服装は、形式主義を嫌い、端正をよしとする塾生の気風を体現するものとなった。

一貫教育校の一つである幼稚舎の制服の歴史も古い。1887（明治20）年頃には、制服として洋服を着るようになったが、まだ型は不統一。約10年後に、7つボタンの紺の詰襟風の上着、前につばのついた大黒帽



幼稚舎生の服装(1891[明治24]年)。詰襟風の上着が申し合わせによる服装であったようだ

が制服として指定された。しかし、保護者から、詰襟の上着は発育盛りの児童の胸を圧迫して好ましくないという意見が出され、医学部教員の意見も取り入れながら、1920（大正9）年、現在に通じる活動的な制服に変更された。

明文化された服装規定

昭和になり、1940（昭和15）年には初めて明文化された学生服装規定により、大学部予科・本科などの塾生に黒の詰襟・丸帽着用が義務づけられた。第2次世界大戦中は、制服の上に薄手の教練服を着ることもあった。

戦後、旧制大学本科（のちの新制大学）の服装は自由化されたが、それでも引き続き制服制帽の着用者が多く、中には海軍の軍服を仕立て直

したものを着る塾生の姿も見られた。また、徐々に増え始めた女子学生たちの私服姿は、キャンパスでひとときわ目を引いた。

私服が広がった1960年代には制服は主に就職活動と卒業写真用になり、その後これもスーツに代わった。現在、伝統の詰襟制服は、体育会と応援指導部を中心に着用されている。制服の歴史は、義塾の歩みに寄り添っているのである。



1954～55年頃の図書館学科の学生（図書館学科教授George S. Bonn氏撮影）

制帽の記章から誕生したペンマーク

義塾を象徴するペンマークの起源には諸説あるが、洋服用の副産物だったとも言われている。1885（明治18）年頃の洋服統一の動きの中、塾生たちの間で帽子の記章についても検討が行われた。そしてある塾生が、当時の英文教科書クワッケンボス著『コムポジション・アンド・レトリック』の文中に「ペンには剣に勝る力あり」の語句を見つけ、これを具象化してペンを交差したデザインを作り、帽子の記章にした。それが後に塾当局に追認されて、ペンマークになったとされる。